

# 古里「碧水」地名考 飯名碧水

一

マスコミは、揃ってトップニュースで伝えた。二〇一六年三月二十六日、待望の北海道新幹線が開通、一番列車「はやぶさ十号」が夢を満載して津軽海峡を一気に渡ったと、一方、かつて国鉄札沼線の中心的位置にあった新十津川駅の発着列車がとうとう一日一往復となり、午前九時四十分「日本一早い最終列車」が発発した、とも。

こういうニュースに接するたびに、世の中の激変にただただ戸惑うばかりである。老境に入ると、古里への郷愁を覚える人が多くなるという。七十八歳の私も実はその一人だった。懐かしい想いをめぐらせているうちに、国鉄時代の札沼線にあった古里の駅「碧水」に想いが及んだ。わが家は、駅から百メートルも離れていない所にあった。

この日、ふと思いついた。「今日の脳活は、かつて古里の実家のそばにあった碧水駅について調べてみよう」と。「碧水」とは現「北海道雨竜郡北竜町碧水」のこと

思い立ったが吉日、早速、近くの区立図書館へ向かった。あちこちの書架を回って適当な本を探した。『北海道地名小辞典』などがあったが、「碧水」の項目自体がない。「ど田舎だったから、載っていないか」と、いったんはあきらめようと思った。

それでも、せっかくだからと、さらに探し回った。右往左往したかいかがあった。それも、『北海道の駅八七八ものがたり―駅名のルーツ探究―』という、駅名の起源・由来を編集した本を見つけた。発行は二〇〇四年。ラッキーとばかりに勇んで、「碧水駅」を索引で探した。

あった。復元線もはるか遠い昔に廃止され、今はその新駅舎も痕跡しか残っていない路線の廃駅なのにきちんと載せられているではないか。感激した。急いでページをめくり、「碧水」を目で追った。懐かしい名があった。設置の経過は明快に示されていた。

◎一九三一年（昭和六年）十月十日、開通・開駅。

◎一九四四年（昭和十九年）七月二十一日、太平洋戦争の激化で休止、レール等撤収。

◎一九五六年（昭和三十一年）十一月十六日、復元、再開。

◎一九七二年（昭和四十七年）六月十九日、廃止・廃駅。

だが、次の瞬間、書かれているルーツの説明を読んで驚いた。つい、「えー、これってなに？」と叫んでしまった。懐古の念に水を差されて、身を入れてその説明を何度も

読み返した。深呼吸して、気になる隣の駅のルーツ説明も読んでみた。どうも違和感がある。変だ。じっくり取り組んで、調べてみるだけの謎を含んでいそうだ。頭の体操には持ってこいだ。

また、こだわり癖が頭をもたげた。疑問・疑念をもってしまうと、とことん追究する癖が、この歳になってもまだ残っている。時間はたつぷりある。昔の様子や時代背景などについてもおさらいをしながら、ルーツ探索を楽しむことにしよう。いつもの独り言、一人問答を始めた。はやる気持ちを抑えて、とりあえず貸出し手続きをして本を借り出した。これを手掛かりに家でじっくり取り組むことにした。

書いた人はどんな人物だろうか。奥付の「著者紹介」を見て、畏れいった。著者・太田幸夫は、根っからの国鉄マンで、六十年以上も鉄道関係の仕事一筋に生きた筋金入りだ。著書が何冊もあり、鉄道通の著名人であることもわかった。

こんな人がいかげんなことを書くはずがない、との思いがあったが、念のため、他の文献にも当たってみることにした。幸いなことに、巻末には「おもな参考文献」として十冊の単行本の名が挙げられており、底本としたのは二冊とされていた。

また、区の図書館に行き、この二冊に直接当たってみた。一冊目には、廃止駅の記述はなかった。二冊目の『北海道／駅名の起源、一九七三年版』には、廃止駅の記述もあり、「起源」の項目の下に関連する記述があった。「ありや、大同小異のそっくりさんだ」。

このことから、太田著の「碧水駅」の説明は、この書からの転載と判断された。となると、原点となる記述の確認調査は一九七三年以前、四十三年以上も前の文献にさかのぼらざるを得ない。どうしようかと迷った挙句、覚悟して続けることにした。ところで『北海道／駅名の起源』って本の正体は？ これを先に見極めてみようかと探った。

国営の経営母体によって半ば編集・発行されてきたとわかった。北海道の駅の起源を解説した、このガイドブックの初版は一九二九年（昭和四年）の発行だった。以来、一九八七年（昭和六十二年）の国鉄分割民営化まで約六十年間にわたって発行され続けてきた超ベストセラーである。この間、何度か大きな改訂もあったようであるが、広く旅行者などに利用されたので、新路線・新駅の開業にも即応する形で増補改訂も重ねてきた。そのため、頻繁に初版本を発行してきたに等しいものであった。初版から最終版までの間は四十四年もある。中間ぐらゐの時点で発行の、太平洋戦争終戦後の改訂版『一九五〇年版』があった。その内容で見当をつけることにした。

また、区の図書館で所蔵を探し、借り出した。だが、残念なことに掲載はなかった。この時、レールが撤去され、運行されていない路線の駅は、載せられていなかった。札

沼線の「碧水駅」は一九四四年（昭和十九年）七月に休止になったままだった。

ヒントにはなった。一九五六年（昭和三十一年）十一月の運行再開以降の発行物でなければ掲載されていない、との目安は得られた。そして、内容充実の改訂がなされたという『一九六二年版』を探した。市の中央図書館に所蔵され、貸出禁止だったので、地下鉄と路面電車を乗り継いで行ってみた。『一九六二年版』には、予想どおり一九五六年十一月再開の札沼線は掲載されていた。だが、記述は『一九七三年版』と同じだった。これによって、一九五六年の札沼線再開後すぐに掲載されたとしても、十六年間、同じ説明で起源が語られてきたと推測された。

次は、路線の休止期間が相当あったわけだが、その前の部分についてはどうするか。開駅した一九三一年（昭和六年）十月から休止になる一九四四年（昭和十九年）七月までの間に発行されたものには、理屈のうえでは掲載されていることになる。

ここまでやった以上、投げ出すわけにはいかない。違っていることもあり得るし、確認できれば、納得もいく。最初に札沼北線が開通した一九三二年（昭和六年）十月以降を目安に、また中央図書館で探してみると、初版本（一九二九年版）と同一の書名・発行所のものであった。一九三八年（昭和十三年）九月に発行された、開通してから七年（札沼線全線開通後三年）後のものであるが、やっと探し当てた貴重な本であった。予想通り開業された札沼線の駅が掲載されていて、「碧水駅」も載せられていた。

また、「えー、これってなに？」と驚いた。『念には念を入れよ』とはこのことだ。想定外の内容の記述が書かれていたのだ。わかりやすくするために、これまでに挙げた文献の記述を一括して並べ、比較してみることにした。『北海道の駅八七八ものがたり』からさかのぼる形で並べてみた。

◎碧水（へきすい）

- (1) 雨竜郡一帯は水が濁っているが、この地方だけすんでいるので、「碧水」と名づけた。（『北海道の駅八七八ものがたり』二〇〇四年）
- (2) 雨竜郡一帯は水が濁っているが、この地方だけすんでいるので、「碧水」と名づけられているから、これを駅名とした。（『北海道 駅名の起源』一九七三年版・一九六二年版）

(3) 当地開拓者渡邊八右衛門氏は、子弟の教育に意を用い、明治三十六年四月寺子屋式の小学校を設け、以来年と共に隆盛になり、遂に現在に及んだのである。部落民が同氏の徳を永く讃えるために、その雅号磐水を採って校名としたが、他にも同一名の学校があるので碧水と改めた。その後、地名もまたこれを採るようになったといわれる。（『驛

名の起源』一九三八年。旧漢字等を修正して読みやすくした)

一九三八年版の方がずっと内容が充実している。説明は、一九三八年版とそれ以降のものが全く異なる。「これほど違うとは！ どうなっているのだ！」と叫びそうになった。後で発行の版で変更されたのだから、一九三八年版は不適切な説明だったのか。普通に考えれば、そういうことになるが……。しかし、私の記憶からは、一九三八年版の方がより適切だと思った。私が聞いたことのある話とほとんど一致するからだ。「やっと出合った感動の史料」と言っても過言ではなかった。

駅名の由来の説明にも、戦争の影響が及んでいたのだろうか。不信感を抱いた。一九七三年版だけによった太田もそうだが、各版の執筆者が前の版の記述内容を精査したうえで執筆したとは思われない。

「えー、これってなに？」で始まった驚きの気持ちも、『一九三八年版』の発見でだいぶ平静を取り戻した。調べてみると、隣駅の「和」も「北竜」も記述内容が違っていた。たぶん、他にももつとあるだろう。不信感はいつそう増した。

鍵は、一層の内容充実をしたという改訂版『北海道／駅名の起源、一九六二年版』の辺りにあるだろう。この時、個々の駅名の記述を直接担当した協力者は、「鉄道友の会」北海道支部の小熊米雄・梅木道徳・星良助ら。そうそうたるメンバーだった。本当に精査し英断のうえ前説を覆して新説を示したのだろうか。私には納得がいかず、不信感と謎が残った。

歴史は書き替えられていた、との思いは強い。今も『北海道の駅八七八ものがたり』は流通しているだろうから、仮に一九六二年版から「雨竜郡一帯は水が濁っているが、この地方だけすんでいるので、『碧水』と……」という解説が続けられてきたとすれば、半世紀以上にわたって膨大な数の本で新説(適当説?)が伝えられてきたことになる。「こんな解説は氷山の一角でなければいいが」「著名人の才覚とはこんなものか」との思いを抱いたままだった。

地名・郵便局名・神社名などについての他の解説書(ガイドブック)への引用例も孫引きも、たぶん膨大にあるだろう。

私的には「旧説が適切」と判断するのだが、いずれにせよ、事実かどうかである。かなりの期間を費やした調査は、謎を追加して振り出しに戻った。目の色が変わった、と自覚した。

二

「違う、納得がいかない」などとの批判や指摘に終始するのはフェアでない。どこがど

う違うのか、どこがどうおかしいのか、を具体的に示すことの反証・実証が必要だ。こちらのほうがより適切だという史実・史料を伴う納得のいく説明を探さなければならぬ。気を取り直して、ルート探索作業をまた始めることにした。碧水駅の場合、駅名のルートは結局、地名のルート。地名の由来を主に取り上げている文献を調べ、違った観点からの史料で新しい見解を探すことにした。

地名の由来の調査は、辞典や参考書を手掛かりにした。それも、本格的な分厚い事典、近年発行のものとし、慎重を期して複数冊を調べてみた。多様な編集のものがあるから、ここでは一般性に重点を置き、図書館でよく利用されているもの五冊を対象とし、発行年の新しいものからさかのぼってみた。

◎碧水（へきすい）

(1) 一八九四年秋田県人渡辺八右衛門が小作十戸と入植して渡辺農場開設、渡辺八右衛門の雅号を取って命名。（『北海道地名分類字典』一九九九年）

(2) 渡辺農場の農場主渡辺八右衛門の雅号をとり命名された。（『角川日本地名大辞典／北海道』一九八七年）

(3) 碧水は開拓者の雅号から採ったとか伝えられる。（『北海道の地名』一九八四年）

(4) もとの農場主渡辺八右衛門の雅号が碧水といたのでこの名で呼ぶようになった。（『北海道地名誌』一九七五年）

(5) この辺一帯は水が濁っているが、この地だけの水は澄んでいるので碧水と名付けて地名にしたという。（『北海道局名の旅―北海道地名解―』一九七一年。局名とは郵便局名）

こうして並べてみると、目新しい記述はなく、『駅名の起源』からの引用と思われるものばかりである。興味深いのは、地名辞典類では、近年発行のものが「農場主の雅号」説を多く採用している。『駅名の起源』の傾向とは逆である。

ここで、各種文献記述の検証してみると、入植地の渡辺農場の農場主・渡辺八右衛門の雅号は「磐水」。地名は「碧水」。したがって、「渡辺八右衛門の雅号が碧水といった」「渡辺八右衛門の雅号をとり命名された」の類は間違いと言えよう。

もう一つの、「この辺（雨竜郡）一帯は水が濁っているが、この地だけ水が澄んでいるので碧水と名付けて地名にした」については、ずいぶんと手間暇かけて、あれこれ文献を探してみた。これを証拠づける史料が見つければ、大発見になるからだ。だが、残念な結果に終わった。根拠になる事実の手掛かりも、公になっている具体的な史実や史料も見つからない。謎のまま、私には、全くお手上げである。あきらめた。未来の賢人の解明にゆだねるしかない。

この時点では、やはり「農場主の雅号説」に近い考えを採用するのが順当とみなして、従来の地名の諸説を整理した由来を一例として示せば、次のようになる。

「一八九四年（明治二十七年）に秋田県横手町からこの地に入植した渡辺農場の農場主・渡辺八右衛門の徳を永く讃えるために、部落民が、その雅号『磐水』を採って簡易教育所（尋常小学校）名としようとしたが、他にも同一名の学校があるとの理由で認められなかった。『碧水簡易教育所』と改めて再申請したところ、これが認められ、正式な名称になった。その後、学校名が地域に定着し、地名も『碧水』と呼ばれるようになった」。

仮に、由来の説明はこれでよいとしても、誰もが疑問を持つ点が残ったままである。「他にも同一名の学校がある」とされたことが、具体的には未確認。だれが「磐水」を「碧水」に変更したのが不明。「碧水」と名づけた理由、その意味することも不明である。結局、二次的資料で調べた結果は五十歩百歩だった。方法の限界を悟った。

## 三

これまで放置されてきたあいまいな部分を掘り下げて、少しでも不明点を減らす努力をしたかと思いが募った。これまでに一般的な文献で取り上げられなかった視点、話題の素材にされなかった事柄から切り込む探究を試みることにした。まず、地元、所在地の『北竜町郷土資料館』の展示パネルや『北竜（龍）町史』の記述に手掛かりを求め確認してみることにした。

郷土資料館の入口には、展示パネルが掲げられている。これを眺めると、「北竜町歴史年表」の「明治三十六（一九〇三）年」の「できごと」欄に「碧水に私立盤水（磐水）の誤記）簡易教育所設置」とあるのを見つけた。早速、お目当ての地名が出てきた。念のため、展示パネルの基になった資料は、一九六八年（昭和四十三年）三月発行の『北竜町史』とみるのが順当だから、当然この町史にも載っているはずだと判断し、探してみた。末尾に一覧表で示された「北竜町史年表」を追うと、やはり「おもなできごと」欄に「碧水に、私立磐水簡易教育所設置」とある。

ここでもまた、「えー、これってなに？」という思いに駆られた。というのは、この時期、まだ「碧水」という地名はなかった。これは明確な事実である。分村以前の雨竜村時代から字名（あざめい）は「渡辺農場」だった。したがって、「渡辺農場」とか「渡辺」とでも書かれるべきだった。明らかに本末転倒だ。それに、簡易教育所の「磐水」という呼称は、そのように名づけようとしたが、実現できなかったはずである。伝えられている名称は、確か「私立恵岱別簡易教育所」のはずだ。

そこで、これらを一一つ検証してみた。外堀から埋めるように、関係者に見解を尋

ねる方法をとった。「北竜町ポータル」や北竜町教育委員会事務局へ問い合わせしてみた。それにしても、どうしてこんな記述がなされ、誰にも気づかれないまま、修正されないで今日に至ったのだろうか。推測されるのは、書かれた時点と過去との混同、執筆・編集者の思い込み、過去の記録の機械的転記などだろう。最悪の場合は、辻褄を合わせるためのすり替え操作が行われている可能性もある。

展示パネルでは、転記時の単純な間違いも含むだろう。事実、二〇一二年九月にリニューアルされたというのに、「磐水」が「盤水」とあり、他校記載の箇所では「教育所」が「教官所」とあるなど、明らかな誤記や不統一などが、まだ以前のままで展示されていた。

「碧水に私立磐水簡易教育所設置」とあることに、これに関する史料の存在を確認したいというメールを送った。これに対しては、教育委員会の幹部職から返信があった。その回答には「恵岱別簡易教育所が設置され、碧水にもとにかく形だけでも簡易教育所を設置しようとして明治三十六年に磐水簡易教育所を作り、翌年、磐水を碧水に改め碧水簡易教育所となった（添付資料：『北竜町史』三ページ分、『碧水百年』三ページ分）」とあった。

念のため、教育委員会の見解を確認させてほしいと、再度メールを送った。括弧内が、回答についての受け止めた理解であるが、これでよいかと、疑義点を示唆してみた。

「恵岱別簡易教育所（旧恵岱別小学校の前身に当たる私立教育所のこと）が設置され、碧水（すでに「碧水」という地名があった）にもとにかく形だけでも簡易教育所を設置しようとして明治三十六年に磐水簡易教育所（「磐水」の名を冠した私立の教育所が実際に一年余？の期間存在した。逆に言うところ、この地に「恵岱別簡易教育所」という名の教育所は存在したことはなかった）を作り、翌年磐水を碧水に改め碧水簡易教育所となった（つまり、昭和四十三年発行『北竜町史』の「おもなできごと」欄の「碧水に、私立磐水簡易教育所設置」の記述は正しい）」。

これに対する返信メールはなかった。返信がなかったことを「そのとおり」との意味と受け止めれば、幹部職からの回答は、「碧水という地名」と「磐水簡易教育所」が実際にあったとし、展示パネルの「北竜町歴史年表」（町史の「北竜町史年表」からの転載）の記述は正しいとする見解である。しかし、皮肉にも、幹部職がわざわざメールに添付して送ってくれた『北竜町史』と『碧水百年』が、それは間違いであることを証明している。

指摘されて、記述の誤りに気付いていたとしても、無視をしたか、気付かない振りをしたとも受け止められる。以後の役人が先人の誤りを認め、訂正するのには大変な勇氣

がいる。書き残されてきた膨大な記録を書き換える面倒と混乱が生じるので、知らない振りをして、そのままにしておくのが無難である。役人がとぼけるのは、よくあることである。この北竜町にはいい例がある。前身の北竜村が雨竜村から分村した月日（開村日＝村の誕生日）を長年間違えたまま正さずに放置してきた経緯がある（当村も母村も別々の間違った月日を挙げる二重誤記をしていた）。

話は錯綜するのだが、実は、幹部職員の主張を支える証拠文献もある。一九五八年発行の『北竜村農業協同組合史』である。同書には、「渡辺農場でも寺子屋式教育をしていたが、三十六年磐水教育所が正式に開所した」とある。町史年表作成者は、これを根拠にしたとも言える。『北竜町史』は同書の記述をそのまま転載した部分が多い。（同書の開拓時代の部分は、詩人・作家で北竜村出身の加藤愛夫こと、加藤松一郎が実名で書き、ごく短期間でまとめあげたとされる。この書には「雨竜村」を「新十津川村」とした誤記もある）

メールの回答に添付された二つの資料文献には、「実際に設置された」とする根拠の記載はなく、「申請したが設置は実現できなかった」とする記述である。『北竜町史』の本文を示してみると、次のように述べている。

「……掘立小屋を仮校舎として私立恵岱別簡易教育所を開設し、……これが明治三十六年二月五日のこと……認可をえて、公立碧水簡易教育所が誕生したのは明治三十七年五月二十五日である。教育所の名称は、最初、農場主渡辺八右衛門の雅号をとって、磐水簡易教育所としようとしたが、他に同名の教育所があつて却下され、渡辺農場の小林支配人の発案で、碧水簡易教育所として再申請、認可をえたもの、しかしてこの教育所の名称がひろく使用されるようになって、ついに字名に発展したのである」。

この教育所を出発点として、百年の歴史を刻んだ「碧水小学校」も、その百周年記念誌『碧小百歩』（二〇〇二年）の中で、校名の由来を「北竜町史」と同様な内容で記している。

最も古い史料として挙げられるのは、一九二二年（大正十一年）二月に発行された『碧水尋常小学校開校二〇周年記念誌』の同窓生の寄稿である。『碧水百年』にも二人の寄稿文が引用されている。その中の一文「開校当時を偲びつつ」は、第四回卒業生・脇田和作によるものであるが、簡易教育所開設当時の様子を明快に記している。

『北竜町史』『碧水百年』『碧小百歩』を含め、後に当時を語るほとんどの公的説明文章は、この脇田の文を根拠としたものである。当時は四年制で、年少であった脇田は、第一回入所生であり、四年間学んだ一人で正規の第一回卒業生。名称は、最初は「恵岱別簡易

「教育所」であり、その後「碧水簡易教育所」となったと記されている。「碧水簡易教育所」の名は全く出てこない。大人になった脇田は、短歌を詠む歌人でもあったが、この文は「脇田唾々晩翠寄」となっている。意味深い雅号を使い、心境を詠んだ短歌も添えている。結局、「碧水簡易教育所」は私立でも公立でも設置できなかった、というのが真相である。地元の有志が編纂した『碧水百年』は、脇田の文と同様の記述の後で、「これが我が郷土碧水の名称の由来である。渡辺氏の功績を遺さんとの心を含んで、今に此の地区を総称して碧水というのである」と記している。

肝心の地名(字名)の名称「碧水」が出てくるのは昭和初めの部落名の記録からである。このことから、事実とは異なる『北竜町史』の「北竜町史年表」も、『北竜町郷土資料館』の展示パネルの「北竜町歴史年表」も、「明治三十六(一九〇三)年」の記述は「渡辺農場にも私立恵岱別簡易教育所設置」と訂正されなければならない。

そして、一九〇四年(明治三十七年)五月二十五日、改称して誕生した「公立碧水簡易教育所(後の碧水小学校)」の名称・碧水が、歳月の経過とともに広く使われるようになり、地名・駅名・郵便局名等となったのである。地名「碧水」の起源は「学校名」となる。

ついでに補足すると、晴れて「碧水」の名称が正式な行政区分(住所の字名)となったのは、ずいぶん年月が経た一九六九年(昭和四十四年)一月一日である。開拓入植以来、様々な名称が付けられ混乱していたものが、現北竜町実施の字名と地番の改正事業によって整理・統一された。同時に、戸籍の本籍地と住民票の現住所も改正された字名・番地と一致するように改められた。約八十年の間、正式な書類には、全域を「恵岱別〇〇番地」と記していた違和感がやっと解消されたのであった。

まだ不明確の事項がある。「碧水」の件である。『北竜町史』の本文を例とすれば、「最初、農場主渡辺八右衛門の雅号をとって、碧水簡易教育所としようとしたが、他に同名の教育所があって却下された」とある。では、他の同名の教育所とは、どういうことだろう。この時の事情を、後で当地の歴史(地名の由来)を書いた人が理解していないか、知っているの作為か、二つのことが一つにされて説明されているからだと思われる。

一つは、『北竜町郷土資料館』の展示パネルの「北竜町歴史年表」に載せられていることが問題なのだが、幹部職からの回答メールの最初にあった「私立恵岱別簡易教育所」のことである。『北竜町史』では、「北竜町史年表」にも、本文の説明にも載せられていることだが、この重要事項を欠落していることに展示パネル作成者が気づいていない(逆に、見る人に違和感を抱かせないように、意図的に載せなかった可能性も考えら

れる)。

『北竜町史』には「本町最初の住人」という見出しの記述がある。井林農場（恵岱別駅通が移転する前は阿蘇農場）のあった所で、こここそ北竜村の起源だと言える場所である。今日もなお「恵岱別」という名称の所に、一九〇二年（明治三十五年）十月一日を開校記念日とする「私立恵岱別簡易教育所」が開設された。

ところが、事実は奇なりで、渡辺農場にも、一九〇三年（明治三十六年）二月五日を開校記念日とする同名の「私立恵岱別簡易教育所」が開設された。わずか四か月後だった。開拓時代の南端と北端に位置する地域の当時の事情だから仕方がないのだが、無関係に別々に教育所設置の準備が進められていて、予定地の字名はどちらも「北竜村字恵岱別」だったから、両方とも「私立恵岱別簡易教育所」の名称を適切として選んだわけである。現在の北竜町のほとんど全域といってもいい広域が、当時は「恵岱別」と呼ばれていた。分村前の雨竜村時代に開校の学校名には「竜」の一字に東西南北などを付けるといふ拘束があったが、分村後は任意に決めてよいとの考えになったと思われる。

同じ村の中に同じ名称の教育所があるのは不適當だ。だれもがそう思った。これも、だれもが納得する形（最初の住人、申請が先）だったので、戸長・菊地徹蔵は井林農場側に永久命名権を与えた。つまり、戸長役場は渡辺農場に、公立に昇格させる前に教育所の名称を変更することを条件に設置申請を受理した。したがって、一年余の短期間ではあったが、同じ村内に二つの「私立恵岱別簡易教育所」が存在したわけである。

二つの同じ名称の簡易教育所が同時に存在したことは確かな事実である。後の役人がこれをわかりやすい形に整えて（変えて）歴史に残そうとしたために、整合性のとれない、ほころびのある記録になってしまったと判断される。（試みられたと思われる策略はこうである。『北竜町史』の「本文」では、井林農場のものは正式な名称を挙げないで、単に「私立教育所の開設」とする。「北竜町史年表」では、渡辺農場のものは名称を変えて、「恵岱別」を「磐水」とする。こう記述すれば、接近して二つの「私立恵岱別簡易教育所」を開設したという記録の不合理性を読む人に見抜かれないで済む）

（ここからは、資料がないために一層の推察で補わざるを得ない部分を含むことになる）  
もう一つの「他の同名の教育所」の話に移る。渡辺農場側は、すぐに変更を受け入れた。草分けの住人の地には勝ち目がなかったし、もともと変える前提の仮称であった。教育所を作ろうという機運の高まった当時の事情から、戸長役場から「まずは形だけでも整えよ」と言われて急いで出した届け出でもあった。

「公立化時には、磐水（ばんすい）簡易教育所にする予定です。いっそのこと最初からこの名称にした方がいいですか」とお伺いを立てたとも考えられる。ここで受け入れら

れていれば、何も問題は起こっていなかった。

ところが、「磐水」に違和感を持った菊地戸長は「この名称にする理由や由来は何か」と問いただした。渡辺農場側は「農場主・渡辺八右衛門の雅号で、彼の功績を後世に遺りたいとの住民の意向を尊重して……」と答えた。

戸長は支庁から派遣された官吏である。雨竜郡役所（空知支庁）が神経をとがらせていた、最も避けたいトラブルが発生する懸念があると敏感に感じ取った菊地は、即座に保留にした。実は、永久に残る名誉は、他の大物農場主二人が欲しがっていたものだからである。彼らの所有地に置かれた尋常小学校は、分村以前の雨竜村時代に、既に無関係の名が付いていた。「北竜尋常小学校」と「真竜尋常小学校」である。

そしてまた、菊地戸長は、とにかく「磐水」だけは取り下げさせなければならぬ、と考えた。紛らわしい同じ名の学校が近くにあれば却下できる、とも考えた。却下できたのだから、「ばんすい」という名の付く所を見つけたわけだ。

念のため調べてみると、それらしい所が確かにあった。当時の空知支庁管内の幌向村バンケソウ部落に一八九九年（明治三十二年）三月一日に開校した「晩翠（ばんすい）尋常小学校」である。遠く離れているし、漢字も違うし、教育所でもないのだが……。この名称は、アイヌ語の「バンケソウ」に漢字を当てたことが由来らしい。ここも後に小学校の名称が地域名になり、現在は「空知郡南幌町字晩翠」という。（『南幌町史』一九六二年）

「これだ」と合点した菊地戸長は「同名の学校が空知管内にあるのは紛らわしい。他に変えなさい」と強引に主張した。だが、渡辺農場側も簡単に引き下がらなかった。「形は整っているし、別名称に変更するには、時間が必要である。私立でもあるし、柔軟な対応をして、正式な名称が決まるまでは少しの間『私立恵岱別簡易教育所』のままで開催したい」と食い下がった。この言い分ももつともで、「磐水」を頑張られるよりも、一歩譲ったほうが無難と、菊地戸長は判断した。同じ村内に二つの「私立恵岱別簡易教育所」が同時に存在した。そして、渡辺農場の教育所が改称されて誕生したのが「碧水簡易教育所」だった。脇田が雅号「唾々晩翠」を使って寄稿したのは、こうした事情を知っているの「ああ晩翠」だったのだろう。

#### 四

校名「碧水」の命名関係の話題に移る。町史等の記述に「渡辺農場の小林支配人の発案で、碧水簡易教育所として再申請、認可をえた」や「小林氏が『碧水』と改めて申請した」とあったが、命名者は、小林支配人だったのだろうか。記述では、そうともとれるが、

これは実務者を指し、実の命名者は別人とみるべきだろう。確かに、小林は事務的な手続きをした人で、現代風に言えば、彼は、広域にわたっていた渡辺農場の農業事務所の実務責任者だった。小林の姓は記録に残されているが、名は不明の脇役の人物である。

教育所開設の事務的手続きには、最初から農場主代理の高橋吉之助や部落代表から一任されていた。しかし、名称の決定(変更)には、当然、農場主などの指示を仰ぐべきと判断した小林は、高橋代理に、その旨を申し出た。農場主・渡辺八右衛門は、同郷の同志・高橋に一切を任せ、秋田県横手町四日町の自宅で大半を過ごし、多忙な日々を送っていた。時間を要したのは、高橋が渡辺と手紙をやりとりし、方針を協議していたからであろう。

この時、渡辺は三十八歳。二十代で横手町の町会議員になり、移住者を連れてこの地に来た時は三十歳で、教育所の設置当時は、現役の横手町長に在任中であった。郵便局長等を兼任するなど、多忙なうえ、鷹揚な人柄であったから、こだわりなど何もなく、いくつかの候補を挙げたが、やはり高橋らに任せるとの回答であった。高橋代理は、渡辺の挙げた候補の中の「碧水」を第一候補に選び、部落代表と協議もし、小林支配人に伝えた。

「農場主の意向も確かめたうえ、部落代表と相談して『碧水(へきすい)』とする。『磐』に代わるのは、石の上に王と白と書く『碧』の字だ。由来は『水がきれいな地域だから』、意味は『青く澄み切った水』、転じて『心にいささかも曇りのないということ』となる。後は任せる」。

そして、高橋は目をつぶり、想いを入植時にさかのぼらせ、遠くから見た暑寒別岳の雄大な景色を脳裏に浮かべた。農場主となる渡辺の率いる十余戸の小作人からなる開拓団がこの地に渡った時、一八九四年(明治二十七年)四月のまだ肌寒い時期だった。秋田から小樽へは船で、小樽から滝川へは列車で、滝川から開拓地(当時は雨竜村の所轄地)へは舟で移動した。いよいよ現地へ入った日は、よく晴れていて、石狩川の支流・雨竜川を北上しながら舟の上から見た眺めは素晴らしかった。広大な雨竜原野の北西側、山間に深く食い込んだ奥地から東へ流れ下る川の流域を眺めながら、この大地をわれわれが開拓するのだと思うと、自ずとみなぎってくる熱い想いがあった。そして、その時、渡辺は、ほれほれする眺めに漢詩へ想いを重ね、高揚感で突然、声高に吟唱し出した。側近の高橋代理は、そのことをありありと覚えていた。

高橋代理から「碧水」とする旨聞いた小林支配人は自信ありげに即答した。

「後はお任せください。『磐』の字の『石』の上が少し変わったですから、部落では、農場主の雅号だと信じて疑わない者も多いでしょう。戸長には、『関係者で協議を重ね

た結果、断腸の思いで「磐水」を「碧水」に変更いたしました』『わかりやすい似た字に変えました』とでも言えば、負い目のある役場は容易に受け入れるような気がします。クレームを付けられる理由はもうない。ことは順調に進み、「私立恵岱別簡易教育所」が設置されてから一年余を経た一九〇四年（明治三十七年）五月二十五日、公立の「碧水簡易教育所」が認可され、新築した校舎の落成移転式も無事終了した。

これで、『北竜町史』執筆者によって、存在したかのように仕立て上げられた「幻の磐水小学校」の一件はほとんど整理された、ということになる。その後、地名駅名・郵便局名などの起源となる「碧水簡易教育所」は、碧水尋常小学校等々と名称を変更し、地域の発展と時代の変遷と共に存続した。しかし、近年の少子化の傾向は止まらない。二〇〇二年（平成十四年）十一月十日に開校百周年記念式典を挙げてけじめをつけ、翌年三月末日閉校し、真竜小学校へ統合された。

五

さて、冒頭に述べたJR札沼線はその後どうなったであろうか。二〇一八年（平成三十年）十二月二十日に開かれた「札沼線沿線まちづくり検討会議」で、札沼線（新十津川駅と北海道医療大学駅の区間）を廃止することについて、JR北海道と沿線四町とが合意した。そして、二〇二〇年（令和二年）五月七日をもって営業を廃止することも決まった。

二〇二〇年に入って、廃止を惜しむ人々によってお別れ列車の運行行事の準備が進んでいた。ところが、突然、最終列車は、未曾有の「新型コロナウイルス」感染拡大で予定を繰り上げ、四月二十七日、住民の代表だけを乗せて新十津川駅を発することになった。

追い打ちがかかった。これまた突然、緊急事態宣言の全国発令で、それさえも中止となった。前夜に急ぎよ発表され、四月十七日午前十時発を最後にあつけない前倒しとなった。五月七日までは運休扱いという、余りにも寂しい悲しい結末だった。一九三二年（昭和六年）十月十日一部線開通、一九三五年（昭和十年）十月三日全線開通、……。新聞等は、数々の難題を乗り越えて開業、戦争による休止、再開はしたものの赤字続きの荒波に大揺れした札沼線の八十八年の歴史を伝えた。

八十二歳になっていた私は、そんな記事をしみじみと読んだ。そして、何回目になるだろう。思い返すように、私はまた『碧水百年』を書棚から取り出した。今回は、挨拶文のページから読んだ。碧水地区振興会会長・村井宣夫の「発刊に当たり」の最初の

行に、なんと渡辺農場の農場主・渡辺八右衛門（十代目）の晩年の書のこと紹介されているのではないか。以前は、飛ばし読みした部分だったので、気づかなかった。

「一碧東流水自から長し」（初代渡辺農場主・十代目渡辺八右衛門の直書）とあった。「清らかな水は東を指して流れ、この古里は永遠に栄えるであろう」（村井宣夫の解説）

本文を探してみると、過年（年月不詳）、宣夫の父・日吉が秋田県横手市の渡辺家を訪問した際の報告が載せられている。十代目の子で、北竜村で暮らしたこともある十一代目の渡辺八右衛門（襲名前は吉郎）がまだ健在で、大切に保管していた先代の想いが込められた直書「一碧東流水自から長し」を披露しながら、延々と回想を語ったとされる。

日吉の父・与作は、十代にしてこの地の初期開拓に加わった人だった。教育所開設に尽力し、敷地の隣に最初の「私立恵倍別簡易教育所」が置かれた。跡継ぎの日吉は一九一九年（大正八年）の碧水尋常小学校第十三回卒業生で、篤農家であり、住民のために議会議員等の要職を歴任し広く活躍した。渡辺家の訪問は、何かの記念の際、村を代表して報告と取材に訪れたものであった。

十代目・渡辺八右衛門は、代々の豪商の家に育ち、子供のころから漢学を学び、詩文も長期間学んだ教養豊かな人でもあったから、漢詩にはことのほか造詣が深かったであろう。漢詩塾で机を並べた後輩の高橋吉之助を可愛がり、誘って北海道に来たので、信頼して代理者と決め一切を任せていたそうだ。

この記録は、私に「漢詩・東流・碧水」の語を含んだものを探せと催促した。古里名「碧水」の由来を示唆しているように思われた。インターネットで検索してみると、すぐにヒットした。中国の盛唐時代の詩人・李白の漢詩『望天門山』という題の名作である。

天門中斷楚江開

碧水東流至北廻

兩岸青山相對出

孤帆一片日邊來

この詩の意味は「天門山が真つ二つに裂けるように、その真ん中を貫いて楚江（長江）が流れている。ずっと東に向けて流れてきた深緑の水は、ここで北に向きを変ええる。兩岸には青々とした山が向かい合って迫っている。小さな舟がたった一艘、太陽のところから下ってくる」と説明されていた。「天門山」は、今の中国の安徽省当塗県の西南の蕪湖のあたりにある山で、東梁山と西梁山の二つの山が、揚子江をはさんで向かい合い、その形があたかも天の門のようになっているところから名づけられたという。揚子江はこのあたりでは「楚江」と呼ばれていた。「碧水」は、青々と深く澄んだ水のこと。

他にも、碧水を詠んだ漢詩があるが、私はこれが最もぴったり合う作品と確信した。

先年、たまたま、鉄道札沼線の衰退の報道に接し、廃駅「碧水駅」に想いを馳せて始めた古里「碧水」の地名考であった。小さな光を当てて、また少し詳しい資料を掘り起こすことができた。正直、最後の最後、喉に引っかかっていたものが取れた気がして、安堵した。本当に取り組んでよかった、との思いがする。長い間踏み込んだ考察が加えられないまま過ぎてきた（なされていたのかもしれないが、誰もが知り得る形で記録されていなかった）、古里の地名の起源・由来について、将来、更に検討・考究してほしい課題を一つ提起し得た。そんな想いを持った。

あえて、新仮説による由来説明の一例を示せば、次のようになろう。

「一八九四年（明治二十七年）、この地に入植した渡辺農場の農場主・渡辺八右衛門が、入植時に雨竜川からこの大地を展望して感動した心境に由来する。中国盛唐時代の詩人・李白の漢詩『望天門山』の一節「碧水東流至北廻」から採って簡易教育所の名に『碧水』を推奨した。これが正式に採用された。その後、学校名が地域に定着し、地名もまた『碧水』と呼ばれるようになった」。

## 六

二〇二二年四月、私は八十四歳になっていた。二〇一六年三月にこの課題に取り組んで以来、二回入院・闘病生活などを経ながら六年かけてやっと一歩前進させたものにまとめ上げることができた。ささやかな探究の試みではあったが、この過程で、知り得た資料、見付けた誤った記録、ひらめいた考察などは記録として残すべきだとの思いを強めた。全国的に言えるのだが、このところ急速に鉄道駅・学校・地域などの名称が消えたり、聞こえのいい名称に変えられたりしていく。いま記録して残さないと、先人の労苦の歴史は泡沫のごとく消えてしまう。また、私の調査で判明したような疑義を含んだ記録例は、他にも多くあると思えてならない。再検討の考究があつていい（著名人の解説であるからといって、鵜呑みにしてはならない、慎重さも必要であろう）。

たとえ、現在の価値観では、後世に残す価値がないものに思える資料であっても、それを後世に残すことで、事の判断を未来の人たちに委ねることができる。書き残さないと、未来の人たちに判断を期待することもできない。未来の人たちは、現在の私たちが未知なことを知り、気付かなかったことに気付いてくれるに違いない。

今日、素人によるこの種の考究については、記録を残す方法はほとんどない。だが、ぜひ解明しなければならぬ未確定の資料がある。蓄積は不可欠である。時代はきっと新しい可能性を開拓する。ドキュメンタリーふうの小説の分野も確立されて、記録の多

様性はぐんと広がる。多様性は可能性の裾野を広げる。時間がかかっても、調査研究による記録の蓄積と慎重なその精査は謎を解き、真実に向かって証拠を一つ一つ積み重ねる。

歴史は絶えず追究され続けられ、書き換えられる。そして、真実は徐々に集約される。ささやかな取り組みの地名考も、やがて地名「碧水」の由緒を明確にする考察に寄与するであろう。美しい「碧水」の名称は湧水のように永遠に残り続けるであろう。

(付記)

◎参照した主要文献(初出順)

- ① 太田幸夫『北海道の駅八七八ものがたり―駅名のルーツ探究―』富士コンテム、二〇〇四
- ② 日本国有鉄道北海道総局『北海道／駅名の起源』鉄道弘済会北海道支部、一九七三
- ③ 国鉄札幌地方営業事務所編刊『北海道／駅名の起源』一九五〇
- ④ 札幌鉄道管理局編刊『北海道／駅名の起源』一九六二
- ⑤ 札幌鐵道局編『驛名の起源』北疆民族研究會、一九三八
- ⑥ 本多貢『北海道地名分類字典』北海道新聞社、一九九九
- ⑦ 角川書店編刊『角川日本地名大辞典／北海道』一九八七
- ⑧ 山田秀三『北海道の地名』北海道新聞社、一九八四
- ⑨ NHK北海道本部編『北海道地名誌』北海道評論社、一九七五
- ⑩ 赤木三兵『北海道局名の旅―北海道地名解―』山本文学会、一九七一
- ⑪ 北竜町史編さん委員会編『北竜(龍)町史』北竜町役場、一九六八
- ⑫ 碧水地区郷土史編集委員会編集『碧水百年』碧水地区振興会、一九九七
- ⑬ 北竜村農業協同組合編刊『北竜村農業協同組合史』一九五八
- ⑭ 碧水小学校開校百周年事業協賛会編集・発行『碧小百歩―北竜町碧水小学校開校百周年記念誌―』二〇〇二

(作者Ⅱ一九三七年一〇月出生・北海道雨竜郡北竜村碧水出身)